獣医療のミライ 2

インタビューシリーズ

金井詠一 麻布大学

臨床における対応力は、しっかりとした“知識の土台”があってこそ

金井詠一
Eiichi Kanai

麻布大学

経歴

2006年　麻布大学卒業

2010年　麻布大学院博士課程修了

2010～2012年　麻布大学獣医放射線学研究室共同研究員、狩野病院（埼玉県）勤務医

2012年～　麻布大学獣医学部助教

2021年～　麻布大学獣医学部講師

所属学会
日本獣医がん学会理事／日本獣医内視鏡外科研究会理事／日本獣医麻酔外科学会

Recommend
金井詠一先生が薦める、この4冊

30号（2021年4月号）

小動物腫瘍科専門誌
VETERINARY ONCOLOGY
四肢皮膚欠損の再建
再建の選択肢を増やそう！
小動物腫瘍科専門誌　季刊誌　A4判　120頁

定価：7,150円（税込）のところ
キャンペーン価格6,435円（税込）

146号（2021年3月号）

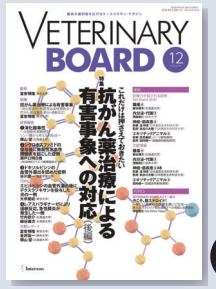
小動物外科専門誌
SURGEON
Technical Magazine for Veterinary Surgeons
口唇・口蓋の外科
小動物外科専門誌
隔月刊誌　A4判　112頁

定価：7,543円（税込）のところ
キャンペーン価格6,789円（税込）

132号（2021年4月号）

小動物内科専門誌
SAIMedicine
Journal of Small Animal Medicine
診断に導く思考戦略
～第一線ではどう考える？～Vol.2 発作
小動物内科専門誌　隔月刊誌　A4判　104頁

定価：4,505円（税込）のところ
キャンペーン価格4,055円（税込）



12号（2020年4月号）

VETERINARY BOARD
これだけは押さえておきたい
抗がん薬治療による有害事象への対応（後編）
臨床の選択肢を広げるケーススタディ・マガジン
月刊誌　A4判　96頁

定価：4,400円（税込）のところ
キャンペーン価格3,960円（税込）

Information

○金井先生の本インタビューは、Eduward Mediaサイトからもお読みいただけます。
詳しくはhttps://media.eduone.jp/にてご確認ください。
○金井先生からお勧めいただいた書籍が、期間限定にてお安くお買い求めいただけるキャンペーンを実施中（キャンペーンお申込期限：2021年8月末日まで）。
詳しくはhttps://eduward.online もしくは専用チラシをご確認ください。

EDUWARD Press
〒194-0022 東京都町田市森野1-27-14サカヤビル2階
tel. 0120-80-1906 fax. 0120-80-1872 https://eduward.online
DM：70001789

発展の余地がある、獣医療の低侵襲治療

—金井先生は、内視鏡外科やIVRという専門色が強い分野を研究されていますが、興味をもつようになったきっかけを教えてください。

私が大学院生だった頃、当時のヒト医療は腹腔鏡やIVRによる低侵襲治療が重宝されはじめた時代でした。ヒト医療の情報を得ていくうちに、「なぜ動物でも同じことができないんだろう?」という疑問を感じはじめ、「IVRで動物の病気を治せないか?」といったことや「ヒトの低侵襲医療を獣医療に活かせないか?」ということに目を向けるようになりました。

—先生は大学院を修了した後、一般臨床へと進まれていますよね。そのまま大学で研究を続けたいという想いはありませんでしたか?

当時、獣医師は動物病院で働くものだと思っていたので、大学院を修了した後は一般臨床へと進みました。大学病院では、さまざまな先生たちが診断を進められたあとに、疑われる鑑別疾患を詰めていけばよかったのですが、一般臨床では「何か元気がない、食欲がない」という広い稟告から診断を進めなければいけません。勤務医として働いた2年間では、そういったさまざまなことを学び、何物にも代えがたい経験を積ませていただいたと思っています。

—一般臨床を経験されたあと麻布大学に戻り、腫瘍の診療に従事されているとのことですが、何かきっかけがあったのでしょうか?

大学に戻った理由は「動物でも低侵襲治療を突き詰めていきたい」という意識が強くなったからです。ただ、大学に戻ったときは「これからどうはじめていこうか・・・」という悩みをもっていました。そんなとき、信田卓男先生に師事する機会があり、「医学の発展は腫瘍と共にあるようなものだから、腫瘍の分野に進むのもいいんじゃないの?」というアドバイスをいただきました。その後、信田先生の診療を手伝っていくうちに、徐々に腫瘍の診療や手術の道へと入っていくようになりました。今は、研究してきたIVRや内視鏡外科を診療へと活かすための研究を続けている最中です。コストがかかってしまうなど、ヒト医療に比べると発展途上の分野ですが、その分、今後の発展の余地が大いにあると思います。

「客観的に振り返る」という学習法

—先生の「学びの方法」についてお聞きしたいと思います。まず勤務医時代、臨床現場ではどのような方法で勉強されていましたか?

雑誌とセミナーがメインでした。「SA Medicine」「SURGEON」といった雑誌は、常に手の届く場所に置いてあり、疑わしい疾患の患者が来院したときの確認用として読んでいました。今のように、インターネットを使ってすぐに情報へとアクセスできる時代ではなかったので、雑誌は診療のサマリーを掴むためのツールとして、とても役に立っていました。一方で、当時は教科書を読むことは少なかったように思います。

—一般臨床は多忙なため、教科書を読み直す時間がなかなかとれない先生も多いと聞きます。

今は、時間をみつけて教科書を開いて見直すようにしていますが、勤務医時代は勉強する分野も多く、そういった時間をあまりとりませんでした。でも、教科書には「解剖学」や「生理学」など、疾患へのアプローチに必要な基本事項が載っているので、“どうして?”“なぜ?”といった本質から理解するのにとても役立ちます。

病気は身体に起こるものなので、身体のことを細部まで知ることは必須だと思います。「なぜ、そうなっているんだろう?」がわかれば、経験のない症例や未知の疾患に出会ったときにイチから考え直すことができます。教科書に書いてある基本的な部分が重要であり、それが面白いと思いながら読めるようになりました。「教科書を見直して振り返る」といったことも、知見や知識を増やすうえで、そして対応力を付けるうえで重要なように思います。

—「診療を振り返る」ために、教科書を熟読する以外に行っていることはありますか?

私は手術後にイラスト（模式図）を描いて、手術記録を残すようにしています。ただし、残すこと自体が目的ではなく、自分の手術内容を冷静に客観視しながら、一度整理することが目的です。文章で残す先生もいらっしゃると思いますが、私は活字が苦手なので、ビジュアルで残すようにしています（苦笑）。

共に未来を担う、獣医師へのメッセージ

—今、若い先生で専門医を目指している方は多いかと思いますが、金井先生は欧米のような「専門医制度」は日本でも必要だと思いますか?

必要だと思います。私は専門医ではないので大きなことはいえませんが…、麻布大学には各分野で専門医を取得されている教員が数名いらっしゃいます。一緒に仕事をさせていただく中で感じるのは、専門医とはその分野のベースとなることを知り尽くしている先生のことだと思います。動物のからだのことや病態生理を幅広くご存知で、何を聞いてもスカッと答えていただけます。一般的には、「専門医」は「専門性が高く、難しいことを知っている先生」と認識されているかと思います。もちろんそういった面もありますが、ベースやスタンダードを十分に学ばれていて、獣医学を本当によく知っていらっしゃると感じています。新しいことにチャレンジするにしても、土台がしっかりしていないと高くは飛べないですよね。

—先ほどの「教科書に書いてある基本的な部分が重要」という言葉とつながりますね。学ぶことはただ覚えることだけではなく「なぜなのか、どうしてこうなるのか」をじっくり考えながら、しっかりと知識の土台をつくっていくことが大事だということですね。

仰る通りです！ここ10年で裏付けのある情報が即時に入ってくるようになり、エビデンスに則って治療できるようになったことで、獣医療はレベルアップしてきました。それではこの先の10年で獣医療はどう変わっていくかを考えると、現在、新型コロナ禍でペットが増えているといわれていますが、それは10年後に10歳以上の犬や猫が増えるということに繋がります。我々はペットの寿命が延びている未来に備え、知識の土台を固め、対応力を上げていかなければいけないと思うのです。